ドイツ文学の伊東静雄

渡部満彦

一

ドイツ語のできない筆者が本稿で伊東静雄とドイツ文学の影響関係を考察することはなんとも心もとなく危険な話だが、静雄の詩を自分なりのことばで理解し、自分なりに鑑賞するためには京都帝国大学の授業等によって、あるいは正岡子規等によって目を開かれた日本の詩歌に対する理解、つまり万葉集から伴林光平にいたるまでの彼のわが国の古典への関心、静雄が親炙したというドイツ文学、ゲーテ、ヘルダーリーン、メーリケ、リルケ、さらに静雄の故郷である長崎県諫早に対する屈折について、これら三者の検討は欠かすことができない。昭和七年二月二十三日付酒井ゆり子宛封書で《近頃の読書は主に音楽の本と独逸語です。音楽のことはさつぱりわかりませんので、それだけ興味が深くあります。独逸語はやつぱりリルケの詩の訳です》と報知している。リルケの『若き詩人への手紙』を中学生で読んだ大岡信は、リルケの文章の根本的な単語は「生」、「死」、「体験」、「孤独」、「詩」であると理解したが（大岡信、谷川俊太郎『批評の生理』エナジー対話第八号、エッソ・スタンダード石油　一九七七、十五頁）、これは伊東静雄の旧制佐賀高等学校時代、京都帝国大学時代のメインテーマでもあったのだから、それらの思念を書き送った大塚格への書簡（大塚梓・田中俊廣編『伊東静雄青春書簡　詩人への序奏』本多企画　一九九七）の分析も不可欠である。

引用した谷川俊太郎との対談で大岡はまた《批評を歴史的にたどれば、プラトンとか、アリストテレスの『詩学』とか、だいたい理想とされる或る状態を想定している点では共通していて、そこから演繹的に、この理想に照らしてこの作物はどうであるかという判断をしている。近代においてもイデオロギー批評のようなものはだいたいその系列》にあるが、《日本の批評家はそういう意味で後ろに背負っているものがあまりないのじゃないかな。小林秀雄の場合でも、最初は象徴派の理論を頭に置き、あるいは心臓の内部に置いて出発した。途中で日本の古典とかいろいろなものを材料として増やしていったという感じがあるけれど、最初に理想的な状態を想定して、それを背中に背負うとか、それに対して反逆するとか、それを目指していくとか、そういうやり方とは違うという気がする。だからヨーロッパの批評の歴史を適用してストレートに日本の批評を理解しようとしても難しいのじゃないかな。日本の場合には「生理としての批評」というふうなところがかなりあると思う。僕なんかの批評も、その意味で言えば非常に日本的な批評だろうと思うよ》（前掲書一二三頁）と語っている。筆者には彼我の批評家の姿勢の違いについて論評するだけの能力はないが、この発言にはヨーロッパに対する大岡の蜃気楼現象のようなものが見

られる。この長い引用の主意は日本的批評云々ということではなく、静雄も正岡子規から出発し、やがて『コギト』のドイツ文学気圏に親しみ、そして日本精神、大和心に転回していくという、小林秀雄と似たような軌跡をたどったということを言いたかったのである。

かつて筆者は《伊東静雄は『コギト』、『日本浪曼派』という雑誌によるところの詩人といわれ、またドイツの新即物主義の影響のもとに、ヘルダーリンの「かかる貧しき時代に、何のために詩人は存在するのか」を問題意識として、わが国古典から学んだ擬古体の文章に翻訳調の言葉を織りまぜながら、硬質の抒情をうたった詩人といわれています。これは通説ですが、しかし、伊東の詩の心を培ったのはそれだけではないと私は思います》（『河』季刊第九十七号　平成五年六月、四頁）と述べた。また同じ講演録で《処女詩集で見せた伊東の「求道の精神」、仏教倫理、仏教思想への関心はわが国の古典へと次第に回帰し、それが第三詩集『春のいそぎ』に結実します。このことは一人の人間における青年から壮年への成熟した道程では必然的現象とみなされます。あたかも小林秀雄におけるフランス文学から本居宣長への道程と同じように。（略）「大和魂」や「神国日本」という当時にあってはギリシャ神話のサイレンのような半人半鳥、鳥とも人間ともつかないものに近づきすぎたために、現在もなお詩人、インテリゲンチャとしての姿勢が問われることになりました》（七頁）ともいっている。

ヘルダーリーンがドイツロマン派の詩人ではないという知識しかなかった筆者が、「これは通説ですが」と逡巡して述べた背景には、自分なりに新即物主義、ヘルダーリーンと伊東静雄との距離に目が行き届いていなかった上に、吉田正勝の「一冊の詩集」（富士正晴編『伊東静雄研究』思潮社　一九七一、三五五～八二頁）と、後述する鼎談における川村二郎の発言が念頭にあった。吉田の「一冊の詩集」という文章は「ドイツ文学の伊東静雄」と「十五年戦争の伊東静雄」というテーマを提起し、後者のテーマは稿を改めて真摯に考察しなければならないくらい大きな問題である。ただ私たちは「一冊の詩集」に対する吉田自身による唖然とするような発言、つまり「一冊の詩集」は〝拙い〈フィクション〉〟で、それを小高根が真面目に取り上げたという発言を紀要論文「再考　伊東静雄とヘルダーリーン」（『大阪樟蔭女子大学論集』第三四号　一九九七、二五五～六五頁）の二六三頁で聞かされるからである。誰あろう「一冊の詩集」を書いたのは吉田正勝自身なのだから。「一冊の詩集」を梗概する前に、また川村二郎の言述に触れる前に静雄のドイツ語、ドイツ文学への関心がどのようなものであったかを『伊東静雄青春書簡　詩人への序奏』、人文書院版『定本伊東静雄全集』（一九七一）で一覧してみよう。

旧制佐賀高等学校一年生の大正十二年四月十九日付大塚格宛書簡に《独逸語ガ私共ノ第一外国語デスカラ大分キタワレマス、一向ニ解リカネマス　暗記物ハスベテ教科書ハナクテ一日三四頁ノ筆記ヲ致サネバナリマセン》（九頁）とある。

大正十五年二月十日付には《近頃はショペンハウエルの〝宇宙と人生〟を読んでゐる／大変平易で。然も堂々たるものだ。暇があつたら一読したまへ》（七九頁）とすゝめているが、ヘルダーリーンの十八歳年下で同時代人ともいえなくもない、ドイツの哲学者 Arthur Schopenhauer（1788–1860）を原書ではなく、大正十四年玄黄社から刊行されたショーペンハウエル著、増富平蔵訳の『宇宙及人生：原名・意志及び心識としての世界　上、中、下巻』に目を通したようだ。確証があるわけではないが、訳本の標題が一致する。大正十五年五月十五日付には《僕は壁上にこんな文句を書きつけておいた。Sowohl Reichtum als auch Armut wird nicht stolz》（一〇六頁）とある。ここにはリルケの〝Denn Armut ist ein großer Glanz aus Innen〟（富士川英郎訳『リルケ詩集』新潮文庫　一九六三、三六頁）が反響しているか。このドイツ語句が静雄のオリジナルか、出典があるのか詳らかにし得ないためドイツ語関係者の教示を仰ぎたいのだが、〝富貴も貧窮も誇ることなし〟は後年の橘曙覧へのまなざしを想起させる。大正十五年五月二十五日付では《近頃は子規を読んでゐる。ストリン

ドヘルヒの最終の恋を読み耽つてゐる》（一〇八頁）。スウェーデンの劇作家 August Strindberg（1849–1912）の〝最終の恋〟の書誌的事項も現在の筆者には確認ができていない。

昭和四年十二月二十七日付では《チエホフをまとまつて読みだした（略）ツルゲニエフに非常な関心を持ちだしたのも、私の内のユンゲ、ゼネレーチオン（ツルゲニエフの小説の題名でもある）を如何にそだてたらいゝかといふ問題をときたかつたからだ。》（一八〇頁）、《語学をやり出した。（略）約四十日しかつづかなかつた》（一八二頁）。ここでの語学はドイツ語ではなくフランス語の可能性がある。《昨今、私は、語学が、人の感情をにぶらせるぎまん的方法であることをよく知り出した》（同）とも書いているが、約三ヵ月後の昭和五年三月十七日付宮本新治宛封書では《J. Renard（ルナール）を世界文学でよんで、仏語を知りたい念激しくおこりました》とある。続けて大塚宛昭和五年六月十八日付では《私は最後にシユニツレルのドラマの扉の言葉をかいておくだけの理智はある。／„Wir spielen immer; Wer es weiss ist klug“》（一九七頁）とあるが、アルトゥール・シュニッツラー Arthur Schnitzler（1862–1931）は手塚富雄によれば、《愛欲の心理の分析と描写の大家であって、終始デカダンスの世界に住みついたといえる。ウィーンの医者であったことが、彼の芸術をこまやかで鋭い、またメランコリックなものにした。『アナトール』（一八九二）、『恋愛三昧』（一八九五）など。わが国にも以前から親しまれた『輪舞』（一八九六―九七）も、愛欲の世界をじつに皮肉に取りあつかった対話劇である》（『ドイツ文学案内』岩波文庫別冊三　一九六三、二四四～五頁）と紹介されている。シュニッツラーのどの作品から „Wir spielen immer; Wer es weiss ist klug“ を引用したのかの論証も終わっていない。昭和四十六年刊岩波版『鷗外全集』の翻訳作品にはこの句に相当する日本語は見だせない。

大塚宛書簡の方は見落としがあるかも知れないが、このくらいにして『全集』に移ろう。詩では「新世界のキィノー」はドイツ語 Kino からか？ 『呂』昭和八年四月号の VERKEHRSINSEL という題、訳詩ヘルデルリーンの „Hälfte des Lebens“ の断片、ケストネル「上流社会の人達・海抜千二百米」（『呂』昭和八年七月号）、ハイネ「清掃」（『呂』昭和九年七月号）。散文では「談話のかはりに（一）」で言及された独逸抒情詩集（本稿一八五頁下参照）、エリッヒ・ケストネル（「事実のロマンス）、新即物主義、表現主義、リルケ、ゲオルゲ、「談話のかはりに（二）」でのライネル・マリア・リルケの『形象の本（ブウフ・デル・ビルデル）』、「松下君と私」の《私にヘルダーリーンの詩を共同で訳さないか、お前の詩風はそれに向くと言はれて大へん有難かつた》（『全集』二二八頁以下同様）。『日記』では《谷川君からヘルデルリーンかへして来る》（昭和十八年十月十九日）（二八一頁）、それから誰もが論ずるリルケ。

続いて『書簡』を見てみよう。昭和四年十二月二十一日付宮本新治宛、ツルゲニエフ「Frühlingswogen」を読んでいることを書き送っているが、誰のドイツ語重訳で読んだのか？ 宮本のために静雄は冒頭を「たぬしき日、幸みちし時！ 春涛に似て、なれ（汝）は騒過するのみ」と訳している。さらに「Frühlingswogen」を早くかたづけて「Väter und Söhne」に取り掛かりたいが、《然しどうも独逸語の表題が、複数になつてゐるのが、どうも神経に障つていけませんな》（三六六～七頁）とも書いている。昭和五年四月七日付酒井ユリ子宛《独逸の小説家、トーマス・マンといふ人はいい人ですね》（三六八頁）。九月二十四日付酒井ゆり子宛、メリケのあの傑作（『プラーグへの旅路のモーツァルト Mozart auf der Reise nach Prag』）を読み終わる、昭和五年十月二十三日付クロイッツェル・ゾナテに寄する詩「生物の道」、昭和十年五月十九日付池田勉宛《文学と体験を訳した服部正己君に二三度会ふ機会がありまして、独逸の文学評論かなんかを読みながら、独逸語を根底的に勉強したいもんだと、洩らしました》（三九〇頁）。

昭和十年十二月二十一日付酒井ゆり子宛、《この前お逢ひしたとき

私の哀歌はモルゲンに似てゐる。又拒絶といふ題は独逸のリードに似てゐるといはれましたが、あれは私の詩の今迄の批評の内で一番正しいものです。（略）近頃、シューベルトの曲のついた「冬の旅」といふ詩をみて感心し、（略）ヘッセとレーナウの詩をよんでゐます。あなたに訳して送つてあげたい程です。私より少しうまいです》（三九二～三頁）。「訳して」とあるからドイツ語を参看しているわけだが、原典はどれだったのだろう？　昭和十一年四月十三日池田勉宛ニイチエの訳詩。昭和十一年十二月酒井ゆり子宛《この頃はゲーテの詩をよんでをります》（三九九頁）。昭和十四年七月二十三日付富士正晴宛《床にねながら又『指導と信従』よんで感動してゐます》（四一三頁）。『指導と信従』は Hans Carossa（1878–1956）の著作で、『全集』編註（五四一頁）にはハンス・カロッサ著、芳賀檀訳（昭和十二年、建設社）とある。昭和十四年十月十九日大山定一宛はリルケ著、大山訳『マルテの手記』（白水社）の寄贈に対する礼状で、《私が詩を本気に書く気持になりましたのは、リルケの新詩集をよんでからであります。詩だけでしか表現されない種類の、思考の正確さが、わたしにもいくらか理解されたからであります》（四一八頁）。十月二十二日付富士正晴宛《わたしはこの二三日詩かく気持やうやくおこりました。一つ試作をやりました。これはつまらんものですが、一つの糸口をみつけました。それはかなり、あなたの立原論によるところが多いのです。そしてリルケと。具体的に云ふと、三行三連の詩形式の完成といふのが、私のいまの野心です》（四一九頁）。昭和十八年十二月十二日付高安国世宛はリルケ、高安訳『ミュゾットの手紙』（甲鳥書林）の寄贈に対する礼状で、《私はこの三、四年志すことがございまして、外国の文学見ないで過したのでありますが、先日、ふとした機会にて、リルケの『風景画論』（谷氏訳）といふものを読み始めまして、わが国古来の風景観との差異など今更色々考へて興味深く、今少しリルケのもの改めて読直しもし、新しく読んでみようかといふ気持でゐました》（四六二頁）。『風景画論』は谷友幸訳、三笠書房刊行「リルケ全集第五巻」。昭和二十二年八月二日付田中克己宛《このごろは又少しづつドイツ語の復習をしてゐます》（四八九頁）。九月一日付富士正晴宛《収穫は作詩一篇。リルケ約六十篇を独逸語でよんだこと》（同）。昭和二十三年一月八日付栗山理一宛はがきでは大山定一と一緒にすこしまとまった仕事の計画があると送信しているが、大山との協同はドイツ文学関係の翻訳だったのだろうか？　昭和二十三年七月七日付田中克己宛は田中訳『ハイネ詩抄』（奈良三興出版）への礼状。

『全集』の詩、散文、日記、書簡から静雄のドイツ語、ドイツ文学との通交をざっと一覧したが、吉田正勝のレビューにもあるように、「伊東静雄とドイツ語・ドイツ文学」に関しては多くの論稿があり、それらの全部に目を通すためには参考書目の助けが必要だろう。

伊東の蔵書の中にヘルダーリーンの Reclam Universal Bibliothek Nr. 6266–6269 の Gedichte がある。出版年がないので一九二一年と推定されている（三～六頁に Will Vesper の「Hölderlins Leben」があり、それに Meisen 1921 と年が記載されているので）が、昭和二十年七月十日明け方の空襲で家財の大半と書籍の全部が焼けたとすると（十一月二十九日付栗山理一宛封書）、新たに買ったものか。標題紙にはヘルダーリーンの若いときの肖像写真があり、三七四～六頁が目次になっている。問題は目次で静雄は気に入ったらしい作品に青インクで○印をつけている。それらは Die mittlere Zeit（1795–1799）では „Dem Sonnengott“, „Sokrates und Alcibiades“, „Ihre Genesung“, „Abbitte“, „Diotima“, „Abschied (an Diotima)“, „Hyperions Schicksalslied“, „An die Parzen“, „Der Zeitgeist“, „Des Morgens“, „Empedokles“ に、Höhe und Ende（1799–1812）では „An Eduard Zweite Fassung“, „Ermunterung Zweite Fassung“, „Dichtermut Zweite Fassung“, „Der gefesselte Strom“, „Menons Klagen um Diotima“, „An Eduard“, „Der blinde Sänger“, „Andenken“, „An die Hoffnung“ が選ばれている。„Brot und Wein“ や二七二頁の „Hälfte des Lebens“ には何故か印が無い。

二

六年生になる長男の〝詩を一つ選んで、詩人を調べたり、感想を書いてくること〟という宿題で相談された吉田正勝は文庫本「伊東静雄詩集」をすすめる。吉田自身が伊東静雄という名前を知るのは小学校四年生のときであった。当時旧制大阪府立住吉中学の一年生だった吉田の兄が「学校へ行くのがいやだ」と言い出す。コジキと渾名される国語教師が一番前の席に座っていた吉田の兄に昨日学習した明治天皇の歌「アサミドリ　スミワタリタルオオゾラノ　ヒロキヲオノガ　ココロトモガナ」を復唱することを命じた。予想外の指名に復唱できなかった兄に、コジキは「お前は非国民だ。明治天皇の御製を覚えようとしないなんて！　お前なんか明日から学校を止めてしまうとよい」（三五八頁）と叱責し、授業の終了まで教壇脇に立たせておいたというのである。この出来事は住吉中を目指す吉田正勝に恐怖心を起こさせた。兄を慮る母親が集めたコジキ教師に関する評判はいずれも教師に好意的なものばかりであったし、また事実、三年後の昭和十七年入学時における「コウちゃん」に対する吉田の印象は《生長ざかりの中学生たちの発散するむんむんとした体臭の前で、そっと息をとめている小動物、ただその大きな瞳だけが恐怖におびえて、無闇やたらとあたりをなめ廻している》（三六〇頁）というものであった。

やがて大阪を襲うB29爆撃機の編隊は中学校教育を変えていった。住吉中も空襲警備体制を敷き、吉田は伝令の役をあてがわれた。爆撃を受けたある日、静雄がいるとは思わなかった伝令の彼は級友に「あんなあ、空襲警報解除やて、もう帰ってええそうや」、それと同時に左頬に鉄拳がとんだ。鉄拳の主は伊東静雄だった。「なんだ、その様は！　それが先生に向かって口にする言葉か?!　それが級長のとる態度か?!　今をどういう時だと思っているのだ！　この非国民！」（三六三頁）。先生に促されて、挙手の礼と、その場にあいふさわしい報告を強制された。兄の二の舞は絶対にするまいと決心していた吉田は、《当時としては最も辛い非難の言葉》（同）、非国民という蔑称を浴びた。

B29爆撃機の撤収は戦争の終結であり、教師の叱咤、鉄拳の終結でもあったが、飢餓の始まりでもあった。吉田の国語担任の病欠によって、彼は伊東に国語を教わることになり、コジキによって国文法に目が開かれ、それが遠因で理系志望の進学を文系に変更するきっかけになった。そして高校二年生の昭和二十二年暮難波駅、御堂筋に面した書店創元社で吉田は『反響』を手にする。

《中学時代、伊東静雄の国語の時間が高校文科への道を突然促したように、高校時代に習い覚えたドイツ語の味が、偶々私の意に叶ったというにすぎなかった》（三六八頁）ということでドイツ文学を専攻することになるが、ドイツ文学学徒として《いま伊東静雄の作品に目を向けるならば、彼とヘルダーリーンとの斯界では定説となっている関係が、私の予想を遙かにうわまわるものであることに驚かされる。あの汗臭い悪戯好きの中学生たちを相手としなければならなかった多忙な毎日のなかで、彼が得ていたヘルダーリーン理解は、一般に私が外国詩人からの影響という概念で捉えていたものを越えていた。ヘルダーリーンの詩の独自な文体の特徴を、ドイツ語を専門とする私が三十才を過ぎた後、漸くドイツ遊学によって得て来た程度以上に、語彙・語法・構文・韻律などに関する知識にいたるまで、彼は既に居ながらにして読みとっていたのである。就中『わがひとに与ふる哀歌』のいくつかの詩篇を前にするとき、彼の時代までに到るドイツ詩の伝統的な構文を破壊しつつ、遥かに高次な詩の秩序を確立していったあのヘルダーリーンの独創的な試みが、伊東静雄によってエンペドクレースを思わせる独自の強烈な精神と発想法に支えられつつ、日本語の枠の中で再現されつつあった過程をまざまざと思い知らされるのである》（三七〇～一頁）

昭和四十四年二月『歯車』十七号に発表されたという吉田の「一冊の詩集」の梗概が長くなってしまったが、吉田のこの文章はドイツ文学に暗い筆者をして伊東静雄のヘルダーリーンの「かかる貧しき時代に、何のために詩人は存在するのか」を問題意識として、生涯にわたって詩作と格闘したという静雄像を組み立てるために十分であった。しかし「一冊の詩集」発表から二十六年後、吉田は「「コギト」とヘルダーリーン」(『大阪樟蔭女子大学論集』第三二号　一九九五、二二九〜三八頁)では《伊東静雄の詩の成立におよぼしたヘルダーリーン(Friedrich Hölderlin, 1770–1843)の影響は、従来言われてきたほどには決定的ではなかったのではないか》と書き始めているから驚きである。さらに「一冊の詩集」は真実を語るエッセイや論文のたぐいではなく、〝拙い〈フィクション〉〟でしかないという吉田の後日の発言は小高根への冒瀆でなくてなんであろう。複数文章の吉田が同一人であることは『言語文化研究』十九巻(一九九三)二一頁に付された「吉田正勝教授の略歴と著述目録」が証明してくれる。

さて川村二郎であるが、一九七九年八月思潮社『伊東静雄(現代詩読本十)』の磯田光一、藤井貞和との討議「拒絶と凝視の絶唱」(一二〜二八頁)、一九七一年十月ユリイカ『増頁特集伊東静雄』の菅野昭正、大岡信との共同討議「ものと超越　伊東静雄をめぐって」(一三八〜五三頁)も筆者の、「これは通説ですが」の根拠となった。

前者で川村は磯田の伊東は〝ヘルダーリンの本を多く持っていた〟という発言に、〝持っているということと読むということは別だ〟と応じている。さらに磯田の〝「帰郷者」にはヘルダーリンの影響はないか〟という問いかけにも、〝あるとは思えない、「曠野の歌」は最初メーリケと思って読んだが、小高根二郎の岩波文庫の翻訳からのヒントという記述に、なんだその程度かと拍子抜けした。小説『プラハへの旅路のモーツァルト』の最後に付された詩の換骨奪胎で、具体的にヘルダーリンなり、リルケなどのドイツ詩人から、深く読み込んで、何か出てきたとは考えない〟(十七頁)と答えている。後者では、〝伊東というとすぐにヘルダーリーンがでるが疑問だ、リルケならわかるが、ヘルダーリーンから受けた影響はないのではないか、ヘルダーリーンは das Ding の外の世界、つまり革命、古代世界、ユートピア、普通の人間には現実とは考えられない世界への志向から詩語が誕生するが、静雄にはそういう志向がない〟(一四二頁)、〝ヘルダーリーンに本当に接近したという証拠はあまりない〟(一四四頁)。〝ヘルダーリーンの後裔か、そのあたりの末期ロマン派の雰囲気みたいなものが、一番身近だったという気がする(一四六頁)〟と述べている。

このようなヘルダーリーンに対する吉田正勝の「一冊の詩集」と川村二郎の相反する見解が、繰り返すが筆者をして「これは通説ですが」と言わしめた要因であった。そこで本稿では吉田のいくつかの論文に依拠しながら、ヘルダーリーンを中心に「ドイツ文学の伊東静雄」を見ていきたいが、その前に「十五年戦争の伊東静雄」について簡単に触れておく。

このテーマは稿を改めて論議しなければならないのだが、吉田は「一冊の詩集」で《戦後、伊東静雄が詩人として漸く脚光を浴びるようになった頃、本郷の学生であった私の友人たちの間で、彼の戦争詩が話題》(三六四頁)になり、一人は伊東の純粋な戦争詩の存在に対して詩人一般の内的構造の真実性を疑問視するといい、一人は語気鋭く戦争賛美は日本ロマン派の行き着く当然の結果だと譲らず、一人は一体誰が完全に戦争の局外に立ちえたか、伊東の戦争詩は彼の資質の純粋性の証しだと考える、と三者三様の議論を展開したという。兄弟ともに「非国民」と罵倒された吉田自身は最後の学生の意見に賛成するといい、伊東にあたたかいまなざしを注いでいる。

第三高等学校から静雄と同じ京都帝国大学文学部を卒業した静雄より一歳年下の長谷川素逝には、

馬ゆかず雪はおもてをたたくなり

という句があり、静雄のように軍馬への憐憫を表情しているが、戦争の拡大とともに千篇一律の皇軍賛歌の中にあって、長谷川には未発表ではあるが、

弟を還せ天皇を月に呪ふ

という句があるという（尾形仂編『新編俳句の解釈と鑑賞事典』笠間書院　二〇〇〇、四六〇頁）。吉田正勝兄弟への「非国民」発言、伊東静雄と金子光晴等、「十五年戦争の伊東静雄」というテーマで他日別途考察したい。

吉田正勝の『言語文化研究』十九巻の一～一八頁に掲載された「伊東静雄とドイツ文学」から見ていこう。伊東静雄の大阪府立住吉中学校の教え子であった吉田正勝は、大山定一の昭和三十六年二月に発表された「伊東静雄とドイツ抒情詩」（『伊東静雄全集』人文書院　一九六一、付録ノート）の文章を引用しながら、《静雄とドイツ文学との関係は別に目新しいテーマではないと》、その文章を書き起こす。大山定一が静雄の第一詩集『わがひとに与ふる哀歌』の製本見本を持参する保田興重郎にともなわれて伊東の家を訪ねたとき、ドイツ語図書が書架一段を占領し、そのすべてがヘルダーリーンとその文献だったという大山の回想から、大山と保田の伊東宅訪問の時期は昭和十年九月ころだろうと吉田は推定する。もしそうだとすれば、陶山務訳『思想するヒュペリオン』が第一書房から刊行されたのが昭和十年、渡辺格司訳『ヒュペーリオン　希臘の世捨人』が岩波文庫となったのが翌十一年、したがって大山定一の「伊東静雄とドイツ抒情詩」という昭和三十六年の文章が静雄とヘルダーリーンとの関連を世間が注目するきっかけを作ったと吉田は解析する。しかし大山定一以前にドイツ文学の中でもとりわけヘルダーリーンとの通交に注目したのは桑原武夫で、そのため静雄研究で論者をしてヘルダーリーンへの言及を避けがたくしたと指摘し、村野四郎、河野仁昭、三枝康高、河村政敏、飛高隆夫らの論考が吟味されている。桑原、大山に続いて伊東とドイツ文学、ヘルダーリーンとの関係を菅野昭正に依拠しながら補強したのが小高根二郎で、《小高根説にならう形で、あるいは反撥する形で、ヘルダーリーン関連論がひときわ派手に展開されることになる》（五頁）と吉田は記述し、鈴木亨、饗庭孝男、関井光男、杉本秀太郎らの見解が丁寧に解説される。

「再考　伊東静雄とヘルダーリーン」では《伊東静雄に関する参考文献には、彼とドイツ文学との関係、とりわけヘルダーリーンとの関係について、不適切と思われる記述が少なくない》（二五五頁）とことわって、吉田精一編『日本文学鑑賞辞典』（東京堂出版　昭和三五）、吉田精一・分銅惇作編『近代詩鑑賞辞典』（東京堂出版　一九六九）から該当箇所を引用して検討している。これらの辞典の典拠は桑原や小高根であろうと吉田正勝は推察する。さらに『新潮日本文学小辞典』（新潮社　昭和四三）、分銅惇作・田所周・三浦仁編『日本現代詩辞典』（桜楓社　昭和六一）が分析され、長年ヘルダーリーン研究にたずさわった高名な手塚富雄の翻訳にさえ誤訳と思われる箇所があるのだから、伊東が「ヒュペーリオン」を杉本秀太郎が想定するほどに理解していたとは到底考えがたいと述べる（二五八頁）。この文章で注目されるのは、「一冊の詩集」に見られたかなりpathetischな調子が《詩「述懐」で〈草陰（くさかげ）の名無し詩人（うたびと）〉と自称する伊東静雄にも、日記・書簡などから明らかなように、人並みの俗気があった》（二五九頁）のように記述に変化が見られることである。そこには吉田正勝自身が「一冊の詩集」から「再考　伊東静雄とヘルダーリーン」までに辿った人生の疲れがにじみ出ていると見ていい。日本近代文学館編『日本近代文学大事典』（講談社　昭和五二）の担当者庄野潤三が《より真実に近い伊東静雄像を伝えているのではないのか》（二六〇頁）という吉田正勝は「パンと葡萄酒」の句「Weiß ich nicht und wozu Dichter in dürftiger Zeit?」の静雄への連係は大山定一の独創で、静雄はこの詩句の存在さえ知らなかったのではないか、それが〈事実〉

として受け取られていったと見る（二六二頁）。しかし静雄の蔵書にレクラムのヘルダーリーン詩集がみつかり、表紙がとれるほど精読した後が見られるので、大山の独創とはいえず事実に近いようだ。

さて吉田正勝の研究者としての資質が問われるのは以下の論述である。《伊東のヘルダーリーン関連説を流布させるのに大きな役割を演じたのは、やはり小高根の「詩人　伊東静雄」であろう》、《彼の確信〈わがひとに与ふる哀歌・エンペドクレス論〉を立証するために、小高根はさまざな資料を引き合いに出しているが、この〈確信〉が、最後に傍証として紹介している「一冊の詩集」（「歯車」17号、昭和44年2月）と題する拙い〈フィクション〉の中の〈エムペドクレースを思わせる独自の強烈な精神と発想法〉という表現に触発された、単なる〈思いつき〉にすぎなかったという可能性がきわめて大きい》（二六三頁）。「一冊の詩集」に触発された小高根の伊東論におけるヘルダーリーン説は伝説となったが、それは単なる小高根の思い付きだと吉田はいう。「一冊の詩集」はさらに富士正晴編『伊東静雄研究』に転載された。「伊東静雄とドイツ文学」で吉田は、《論拠づけに小高根はさまざまな資料を引き合いに出し、ついにはフィクションのはてまでも傍証として担ぎ出している》（五頁）と、フィクションの筆者名も題名も明かさずに書くが、なぜ伊東の教え子が〈思いつき〉の「拙い〈フィクション〉」を書かなければならなかったのだろう。『研究』と銘打った図書に「一冊の詩集」を収録した富士正晴が不明というのだろうか。その論考を「拙い〈フィクション〉」と見抜けなかった小高根二郎が愚昧なのだろうか。富士や小高根が鬼籍に入る前に彼らにそれはフィクションだと釈明したのだろうか？　そうすることが学者の良心であるし、研究者としての態度だ。

「一冊の詩集」執筆当時、吉田自身が伊東静雄詩集を深く味読していなかったか、ヘルダーリーンに対して〝眼光紙背に徹する〟だけのドイツ語能力がなかったか、そのいずれかであったとしかいいようがない。手塚富雄の誤訳までを引き合いに出すということは、それはそれで大切なことであろうが、自身の名前も出さずに、「拙い〈フィクション〉」というような姑息な表現はやめて、「再考　伊東静雄とヘルダーリーン」で素直にストレートに吉田正勝の「一冊の詩集」は原稿料か売名かはさておき、愚にもつかない〈思いつき〉の「拙い〈フィクション〉」だったと、詫びるべきであったのだ。

伊東静雄とドイツ文学の関係がどのように考察されているか、筆者の手もとにある静雄関係の図書に目を通してみよう。高橋渡は『雑誌コギトと伊東静雄』（双文社出版　一九九二）の各所でドイツ文学と静雄の関係について触れている。『わがひとに与ふる哀歌』が《ヘルダーリンの「メノンがディオテーマに与ふる哀歌」にならったとは諸家の言うところである》（二五一頁）が、影響の問題は措くとして、「哀歌」期には、静雄には「神」がなく、「永生」の観念が乏しいが、それは静雄自身の問題ではなく日本人として避けられないことだ書いている（二三〇頁）。『春のいそぎ』は静雄が、《親近したヘルダーリンが「パンと葡萄」で発する「乏しき時代にあって、何のための詩人か」の問いに、太平洋戦争という時代を生きる市井の生活者である詩人が乏しき時代に向けて認識と覚悟を示した、静謐きわまりない詩集である》（二五五頁）。昭和二十一年十一月四日付清水文雄宛書簡には《端的に自己の純化を図ろうとする詩人の願望があり、リルケの反映もあって、「観る」詩人の態度について語られている》（二五九頁）という。『反響』以降、《静雄は、いわば猥雑な日常のなかから日常を、ケストナー風にありのままに見、リルケ風に最後の最後まで見とどけることによって詩を発見しようと、「春のいそぎ」までの禁欲的なストイシズムを揚棄し、現実を受容、親和し、詩による自己純化を、観点を変えれば自己浄化を図るのである》といい、作品として「露骨な生活の間を」を例示している（二七九頁）。

田中俊廣（『痛き夢の行方　伊東静雄論』日本図書センター　二〇〇三）は昭和七年三月十二日付酒井ゆり子宛封書の《私は相変らずリルケの訳で、その日その日をすごしてゐます》と、昭和七年十一月

『呂』ケストナーの訳詩から、《この期の伊東の発想は、リルケへの傾倒の下に培われたことは明らかである》（五六頁）と説き、リルケ受容の地盤は、既に卒業論文「子規の俳論」中に準備されていたと述べる。田中は、さらに《伊東にも、ケストナー、ハイネ、ヘルダーリンの翻訳の試みがあり、正式な訳こそ残されていないが、特にリルケには並々ならぬ傾倒を寄せ、詩の閉塞に陥った折には、必ず立ち返る磁場であった》と語り、昭和十四年十月二十二日付富士正晴宛書簡を引用することで自論を補強し、リルケが伊東の内部深くに摂取され、「沫雪」、「春の雪」に結実したと指摘する（一八五頁）。

米倉巌『伊東静雄　憂情の美学』（審美社　一九八五）も小高根二郎を援用しながら、静雄のドイツ文学との関係に筆を費やしている。林富士馬編の小沢書店『日本詩人選十八　伊東静雄詩集』（一九九七）、溝口章『伊東静雄　詠唱の詩碑』（現代詩人論叢書十一、土曜美術社出版販売　一九九八）も例外ではない。三宅武治『伊東静雄　その人生と詩』（花神社　一九八二）では《リルケ、ヘルダーリン、ニーチェ等を読んでいる。ドイツ・ローマン派の詩人たちの作品から考える詩、幻想的な詩の作り方を学んだようである》（四六頁）は少し蕪雑すぎよう。もっとも筆者自身も何ら論証することもなく、かつて他人の尻馬にのって軽々しく静雄とドイツ文学の影響などを文章にしていたのだから笑止ではあるが。一柳喜久子『伊東静雄詩がたみ　光と影』（宝文館出版　一九七〇）は「ヘルダーリンと静雄」（九五～一〇二頁）という節を設けている。

水本精一郎は「八月の石にすがりて」をニイチエの世界だといい、さらにリルケはニイチエから強い影響を受けただろうと水本が思惟するが、リルケの一九一四年六月二十六日付ルウ・アンドレアス・ザロメ宛書簡を引用して、伊東の「朝顔」とリルケの詩境が類似しているとする（「『夏花』論への序章――伊東静雄における肯定精神について――」『山口国文』一九七八年三月、四九～五〇頁）。また《「夏の嘆き」は朔太郎を直接の対象としつつ、その向う側にゲーテを本質して重ねることによって、日本的なるものにあくまで執しながら西欧的なるものへ向おうという、伊東静雄自身の新しい決意を詠った詩であると言えるであろう》（「『夏花』の起点――伊東静雄における朔太郎とゲーテ――」『山口国文』一九八〇年三月、二四頁）と断定はしていないのだが、「夏の嘆き」にゲーテの気息を見ている。水本の論究は吉田正勝の「リルケ・辰雄・静雄　etc.」（『大阪樟蔭女子大学論集』第三七号　二〇〇〇、一五三～一六三頁）に引用されて検討が加えられているが、吉田の論文「リルケ・辰雄・静雄　etc.」は原典と翻訳・誤訳の問題、翻訳による外国文学の受容とはどういう意味かといったことを考えさせる。

博士論文として提出されたものに手を加えた縄田雄二の『ヘルダーリン――予め崩れる十九世紀近代　伊東静雄における受容との関連にて』（西田書店　一九九六）は、「結語」で述べられているように、《西欧ないしドイツ語圏の十九世紀、ヘルダーリンの詩業、伊東の詩業の三者において同様の過程（引用者註、原-分割 Ur=Theilung が転移する現象）が見られることを説き》（一九七頁）およぶことにあり、そこから伊東のヘルダーリーン受容を分析している。縄田は「わがひとに与ふる哀歌」はヘルダーリーンの「メノーン」で、日本浪曼派の代表作であり、吹田順助の訳詩「メノンがディオティーマの為の悲嘆」（吹田順助訳注『ドイツ語対訳叢書（ヘルデルリン）』春陽堂　一九三二）を熟読していたことは確実だとしている（一六六頁）。日本浪曼派の代表作という物言いは検討が必要であるが、縄田は続けて吹田順助訳に依拠して、《誘うものが何か分からぬまま信じなければいけない理由がある。『メノーン』には、融和を信ぜられぬ苦悩と、融合への希望とが同居している。これに、伊東が、同じ詩集『わがひとに与ふる哀歌』のなかで、誘われる清らかさが信ぜられぬ投げやりな気分を表明していることが照応する》（一七一～一二頁）とする。

確かに吹田順助訳から静雄が詩索を借用した痕跡を認めることができるが、「わがひとに与ふる哀歌」の詩想はいま少し違う所にあるこ

とは後ほど触れる。「私は強ひられる」は伊東が読んでいた「独逸抒情詩集 Deutsche Lyrik 1880–1930.」(Berlin, 1931) に載せられたリルケのドイノの第八悲歌の動物がおのずから想起されるという（一六一頁）。またニーチェの池田勉宛訳詩「シスル・マリア」は「Das Ich」の章に収められているという（一六二頁）。

三

さて、吉田正勝の「伊東静雄とドイツ文学」にもう少し触れてみる。《静雄が『ヒュペーリオン』を愛読していたという証拠はどこにもない。自己の読書について言及することの少なくなかった静雄の日記・書簡にも、この作品については触れられていない。あるのは〈恐らく大学生のころから耽読していたヘルダーリン〉という桑原の臆測と、ヘルダーリーン関係の書物についての大山の回想である。とりわけ『ヒュペーリオン』の痕跡がみられるとされる「有明海の思い出」や「漂泊」が「コギト」に発表された時期にようやく、邦訳『ヒュペーリオン』は陽の目をみんとしていたのである。原書を覗きこむ機会はあっても、多忙な中学校教師であった静雄には、残念ながら精読の余裕はなかったであろう》（七頁）。また《大山以後ドイツ文学者側から、この問題に関する積極的発言は殆どみられない》（八頁）。

吉田は服部正己訳「ヘルデルリーン」が静雄のヘルダーリーン受容の源泉であったらしい、つまり服部訳でヘルダーリーンの魅力を知り、このドイツ詩人に関心を持ったと推測し、昭和十四年四月発行『山の樹』第二号で静雄がヘルダーリーン「生の半ば Hälfte des Lebens」を訳したのは、服部『体験と文学』のヘルダーリーン論がこの詩で結ばれているからで、静雄の訳は服部訳とわずかの違いが認められるだけだともいっている（七～九頁）。

ところで縄田は「生の半ば」と『わがひとに与ふる哀歌』との関係は浅からぬものがあるという（前掲書一七七頁）がどうだろうか。

冬が来たなら、何処に、草花と、陽の光と、土の影とを覓めよう。

これが静雄の断片訳であるが、服部の訳は「黄色き草花と／野薔薇に包まれて／陸は水際に垂れてゐる。／汝ら美ましき白鳥は／接吻に酔ひしれた／頭を崇高く潔い／水底に浸してゐる。／／惨めなわたしは／冬ともなれば何処に草花と／日の光と／土壌の影を享けるやら。／障壁は無言で／冷たく、風に／かたかた風信旗が鳴る。」（縄田前掲書一七六頁）

Mit gelben Birnen hänget
Und voll mit wilden Rosen
Das Land in den See,
Ihr holden Schwäne,
Und trunken von Küssen
Tunkt ihr das Haupt
Ins heilignüchterne Wasser.

Weh mir, wo nehm'ich, wenn
Es Winter ist, die Blumen, und wo
Den Sonnenschein,
Und Schatten der Erde?
Die Mauern stehn
Sprachlos und kalt, im Winde
Klirren die Fahnen.

Friedrich Hölderlin Gedichte / Herausgegeben von Jochen Schmidt. Frankfurt am Main: Deutscher Klassiker Verlag, 1992.—(Bibliothek deutscher Klassiker ; 80) (Friedrich Hölderlin

sämtliche Werke und Briefe / Herausgegeben von Jochen Schmidt ; 1) — S. 320.

川村二郎は《ヘルダーリンの全作中でも、際立って深い戦慄を孕んだ孤絶の詩篇にほかならない》(『ヘルダーリン詩集』岩波文庫　二〇〇二、二三八頁)と解題し、「人生の半ば」と題して次のように訳している、「黄色い梨の実を実らせ／また野茨をいっぱいに咲かせ／土地は湖の方に傾く。／やさしい白鳥よ／接吻に酔い恍け／お前らは頭をくぐらせる／貴くも冷やかな水の中に。／／悲しいかな　時は冬／どこに花を探そう／陽の光を／地に落ちる影を？／壁は無言のまま／寒々と立ち　風の中に／風見はからからと鳴る。」(一一九—二〇頁)

手塚富雄は「生のなかば」として、「黄の梨は枝をたわめ／茨は咲きみちて／野は湖に入る。／むつまじい白鳥よ、おんみらは／くちづけに酔い痴れて／頭をひたす、／きよらかな静かな水に。／／しかしわたしの悲しみは！　どこに／わたしは花を摘もう、冬になれば。どこに／日の光を／地上の蔭を求めよう。／囲壁はつめたく／ことばなく立ち　風吹けば鳴る、／屋根の風見は。」と訳し、《ヘルダーリンの全作品中、最も悲痛な詩である。彼の内面の最深部の告白といえる。ここには暗示や含意はなく、すべては明示であって、しかもそれが伝えるものは限りなく深い。こういう詩には近い知解的説明はいっさい不要で、われわれはただその一語一語に心を沈めればいい》(『ヘルダーリン　下』中央公論社　一九八五、三一二～三頁)という。

いまさら筆者がことわる迄もなく常識なのだろうが、外国詩から日本詩人が受けた影響、あるいは受容といった問題の解明には、詩の一つ一つのことば(詩語)、詩の構成、詩の思想といった複合的な「詩学」からの検討が不可欠で、その場合語学の壁が大きいが、原典を通さずに川村や手塚の翻訳詩だけに頼れば、それは川村二郎からのヘルダーリーン詩であり、手塚富雄のヘルダーリーン詩なのである。

静雄はディルタイの「Hälfte des Lebens」に対する評価は知っていたはずだが、静雄自身のこの詩の鑑賞の仕方は意外と明るいものであったのではなかったか。ヘルダーリーンの「Hälfte des Lebens」は「夜の歌々」九篇の一つとして発表される予定のものだったが、ヘルダーリーンにとっては《おおよそ夜と闇は、昼と光を待ち望む時として捉えらている》と川村は解説する(前掲書二三七頁)。したがって「冬が来たなら、何処に、草花と、陽の光と、土の影とを覓めよう。」の詩句は静雄にあっては〝昼と光〟の「早春」へと転調する。つまりヘルダーリーンの冬の「Hälfte des Lebens」から春へと輪廻する。そしてそれはリルケの「Vorfrühling」の照応だろうか？

早　春

野は褐色と淡い紫、
田圃の上の空気はかすかに微温い。
何処から春の鳥は戻る？
つよい目と
単純な魂と　いつわたしに来る？

未だ小川は唄ひ出さぬ、
が　流れはときどきチカチカ光る。
それは魚燐！
なんだかわたしは浮かぶ気がする、
けれど、さて何を享ける？

『ヒュペーリオン』と伊東静雄の詩想の連関への言及も枚挙にいとまがない。「ヒュペーリオンの運命の歌」(Hyperions Schicksalslied)を川村二郎はヘルダーリンの全詩作中もっとも有名な作品だといい、一七九九年刊行の小説『ヒュペーリオン』第二部に挿入された。場面の設定はトルコの圧制からギリシャを解放するための戦いに参加、心

身ともに傷ついたギリシャの若者ヒュペーリオンがパロス島の港で親友と別離後、海を眺めて来し方行く末を思いやるうちに、長い間手にしなかったリュートをふと取上げ、絃を奏でながら、幼い日敬愛した師から学び覚えた歌を歌うというものである（前掲書二二二頁）。

Hyperions Schicksalslied

Ihr wandelt droben im Licht
Auf weichem Boden, selige Genien!
Glänzende Götterlüfte
Rühren euch leicht,
Wie die Finger der Künstlerin
Heilige Saiten.

Schicksallos, wie der schlafende
Säugling, atmen die Himmlischen;
Keusch bewahrt
In bescheidener Knospe,
Blühet ewig
Ihnen der Geist,
Und die seligen Augen
Blicken in stiller
Ewiger Klarheit.

Doch uns ist gegeben,
Auf keiner Stätte zu ruhn,
Es schwinden, es fallen
Die leidenden Menschen
Blindlings von einer
Stunde zur andern,
Wie Wasser von Klippe
Zu Klippe geworfen,
Jahr lang ins Ungewisse hinab.

（前掲書 S. 207）

ヒュペーリオンの運命の歌

光の中　空高く
しなやかな床に歩を運ぶ　浄福の霊たちよ！
きらめく神の微風は
霊たちへ　軽やかにそよぐ
楽を奏でる乙女の指が
神聖な絃に触れるように。

運命にかかわりなく　天上の者らは
眠る乳呑児のように息づく。
ささやかな蕾のうちに
清らかに守られて
永遠に花咲く
天上の者らの精神は。
浄福の眼には浮ぶ
静かな永遠の
明るさが。

しかし我らの運命は
いずこにも休らわぬこと。
苦しむ人間は

消える　亡びる
見境もなく　一刻から
また一刻へ
さながら水が岩から
岩へ打ちやられ
はては有耶無耶の際へ落ち入るように。

（川村　二八～九頁）

この詩の川村の鑑賞は、《運命とかかわりない天上の霊たちの、あえかな、しかも永遠の美しさを鑽仰する前二節と、人間の運命のはかないよるべなさを歌う後一節とが、いかにも激越な対照を見せていて、忘れがたい印象を残す。ブラームスがこの詩を合唱とオーケストラのための曲に仕立てており、それは必ずしも詩の心を正しく捉えたとはいえない音楽になっているけれども、初めの「ゆっくりと、あこがれ心地」のテンポが、終節に到って爆発的なアレグロに転ずる所は、やはり強い衝撃力を孕んでいる》（前掲書二二二～三頁）というものである。吉田正勝は、《ディルタイの「小説ヒュペーリオン」の節の始めには、『ヒュペーリオン』からSchicksalslied（運命の歌）が引用されている。その第3連の最初の2行〈Doch uns ist gegeben / Auf keiner Stätte zu ruhen〉（引用者註―Deutscher Klassiker Verlagの詩はzu ruhnとなっている）が、宿命に煩わされることのない天上の神々との対比において、死すべき存在として苦悩にみちた人間の悲しい宿命を暗示しているとすれば、「晴れた日に」の〈誰もがその願ふところに／住むことが許されるのでない〉に跡づけうるように、静雄にあっては、「永遠の漂泊者」の一人としての自身の在り方に関係づけられたのである》（「伊東静雄とドイツ文学」九頁）と述べる。ここには杉本秀太郎の鑑賞の影が見られるが、手塚富雄による訳も引用しておく（『ヘルダーリン　上』中央公論社　一九八五、二八九～九〇頁）。

あなたたちは天上の光をあびて
柔らかなしとねの上をあゆむ、しあわせな精霊たちよ、
かがやくそよ風は
かるくあなたたちに触れる、
たおやめの指がきよらかな絃をかなでるように。

天上の精霊たちは運命のない世界にやすらっている、
寝入っている赤子のように
つつましい蕾のうちに
けがれもなくまもられて
そのいのちは
とわに花咲いている、
そしてそのやすらかな眼は
変わらぬしずかな
明るさをたたえてかがやいている。

だが　わたしたちは定められている、
どこにも足をやすめることができないように。
過ぎてゆく　落ちてゆく
悩みを負う人の子は。
ものぐるおしい谷水が
ひとときまたひとときと
岩から岩になげうたれ
はてはその跡も
知られぬように。

「だが　わたしたちは定められている、／どこにも足をやすめることができないように。」の詩句は、確かに「誰もがその願ふところに／住むことが許されるのでない」に通うものがあるが、しかし「晴れ

た日に」の詩想はヘルダーリーンだろうか。

晴れた日に

とき偶に晴れ渡つた日に
老いた私の母が
強ひられて故郷に帰つて行つたと
私の放浪する半身　愛される人
私はお前に告げやらねばならぬ
誰もがその願ふところに
住むことが許されるのでない
遠いお前の書簡は
しばらくお前は千曲川の上流に
行きついて
四月の終るとき
取り巻いた山々やその村里の道にさへ
一米の雪が
なほ日光の中に残り
五月を待つて
桜は咲き　裏には正しい林檎畑を見た！
と言つて寄越した
愛されるためには
お前はしかし命ぜられてある
われわれは共に幼くて居た故郷で
四月にははや縁広の帽を被つた
又キラキラとする太陽と
跣足では歩きにくい土で
到底まつ青な果実しかのぞまれぬ
変種の林檎樹を植ゑたこと！
私は言ひあてることが出来る
命ぜられてある人　私の放浪する半身
いつたい其処で
お前の懸命に信じまいとしてゐることの
何であるかを

引用する静雄の詩作品は人文書院版『全集』による。昭和五十九年九月京都臨川書店から田中克己の「解説」と「著者別書目索引」が付されて復刻された『コギト』では「跣足では歩きにくい土で」が「跣では歩きにくい土で」となっている。筆者の鑑賞は次のようなものである（『河』季刊第七十八号　昭和六十三年九月、四六頁）。

＊　＊　＊

偶然、空一面に晴れわたった日に年老いた母親が強いられて故郷に帰って行った。強制したのは私か、漂泊の地の不人情か、あるいは故郷の血縁、地縁か、それはわからない。しかし、「生涯を詩に捧げたい」（「訪問者」）と決心した「私の放浪する半身　愛される人」よ、誰もが希求するところに住めるわけではない。縦令、詩人であっても、いや詩人であればこそ――石川啄木だってそうではなかったか！　詩人として放浪する半身よ、「千曲川の上流」に到着したという書簡は無事落手した。

四月の終りだと言うのに日光（「太陽」）の力を持ってしても、「村里の道にさへ／一米の雪」が残っているなんて！　なんと故郷より冷徹そうではないか。だが五月になれば、桜樹の裏に「言葉以上の言葉」（萩原朔太郎『月に吠える』序）である「正しい林檎畑」を見ることができた。それはそうだろう、島崎藤村がかつて「わが口唇は千曲川の蘆のごとし」（『落梅集』序詞）といったあの千曲川の上流ではないか。また彼はこうもいった、「あゝ詩歌はわれにとりて自ら責むるの

鞭にてありき」（『藤村詩集』序）と。なるほど「正しい林檎畑」だ！

一方、故郷では「（有力な詩人はみなこの町を見捨てた）と」、「私をゆるすまいとする／成心のある噂がおこなはれる」（「海水浴」）、その故郷を「私の放浪する半身　愛される人」、お前は懸命に信じまいとしているが、しかし「愛されるためには」、「変種の林檎樹を植ゑ」なければならない。放浪する半身、〝詩人たちの自我と野望がぶつかりあう生地獄である詩作という仕事〟の意味も知らずに、お前と共に幼くていた故郷。四月になるともうキラキラする太陽から、頭を保護するために縁広の帽子をかぶって、暑さのために裸足では歩きにくい土に、「到底まつ青な果実しかのぞまれぬ」、詩魂や深い情熱には無関係の一般生活者の粗野な言葉しかもたらさない「変種の林檎樹を植」えなければならない。

＊　＊　＊

一つひとつの詩のことば、その構成、秘められている詩想等の厳密な分析を省略して詩の気息だけに着目すれば筆者にとっては以上のような鑑賞となる。実はヘルダーリーン、その他ドイツ文学との関係でこの詩を読むだけの知識が今のところないのだが。

杉本秀太郎は「晴れた日に」にヘルダーリーンの反響を見ていないが、《これはボードレールでもなく、オスカー・ワイルドでもない、もうひとりの詩人によって書かれた》、《書簡詩『晴れた日に』は、ジャン＝ジャック・ルソーのモティエの石礫のように、理念を信じ、詩を信じている「半身」を追い立てるだろう》と読んでいる（『伊東静雄』近代日本詩人選十八　筑摩書房　一九八五、二八頁）。

四日谷敬子によれば、ハイデッカーはヘルダーリーンの詩作を「存在の樹立」と解釈し、またドイツ観念論哲学とも関係しないと意識していたが、一方、アドルノはハイデッカーを批判して、ヘルダーリーンの詩に社会批判的傾向を見出して強調しているという（『歴史における詩の機能―ヘーゲル美学とヘルダーリン―』理想哲学選書　理想社一九八九、三五頁）。ヘルダーリーンは《意識や反省を一般に「判断」と呼ぶが、彼にしたがえば、かの存在（引用者註――「主観と客観との結合」、絶対的存在）は判断の根源に他ならず、それは主観と客観との端的な合一としての存在の「原＝分割」（Ur=Theilung）によって初めて成立する、と思惟される》（一一七頁）。乗り越えるべきフィヒテの絶対的自我に対して、プラトンの存在論的意義、とりわけ『饗宴』を基礎とするヘルダーリーンの客観的な美の形而上学は、ソクラテスに愛の本質を教示するマンティネイアの婦人であるディオティーマに形象化される。ディオティーマ（ズゼッテ・ゴンタルト）はヘルダーリーンにとって《自身は黙しつつ、静かに霊感を与えつつ、大いなるものを見、神々を歌うことを教えたひとであった》（一二一頁）、《「諸々の時代の廃墟の中」に立ち、「年老いた世界」にひとり生きる「アテナイの乙女」である》（一二三頁）。そして《不滅であるはずの神的に美しいものもまた過ぎ去るということ》（一四一頁）であった。

「Menons Klagen um Diotima」、「ディオティーマを偲ぶメノーンの嘆き」と訳される（川村二郎は「メノン　ディオティーマを悼む」としているが）、この詩と「わがひとに与ふる哀歌」の交感についてもよく言及される。林富士馬のように詩集『わがひとに与ふる哀歌』そのものがヘルダーリーンの詩の世界とよく比較される（前掲書三一頁）といっている。

わがひとに与ふる哀歌

太陽は美しく輝き
あるひは　太陽の美しく輝くことを希ひ
手をかたくくみあはせ
しづかに私たちは歩いて行つた
かく誘ふものの何であらうとも

私たちの内の
誘はるる清らかさを私は信ずる
無縁のひとはたとへ
鳥々は恒に変らず鳴き
草木の囁きは時をわかたずとするとも
いま私たちは聴く
私たちの意志の姿勢で
それらの無辺な広大の賛歌を
あゝ わがひと
輝くこの日光の中に忍びこんでゐる
音なき空虚を
歴然と見わくる目の発明の
何にならう
如かない　人気ない山に上り
切に希はれた太陽をして
殆ど死した湖の一面に遍照さするのに

しかし筆者が『河』季刊第九十七号（平成五年六月）七頁で述べたように、この詩には伊東静雄の他力信心の称名思想が如実に表白されている。「生涯を詩に捧げたい」（「訪問者」）と決心した「私の放浪する半身　愛される人」の求道精神の行き着く先なのである。ここでも鑑賞に到るまでの道筋は省略するが次のように筆者は読む。

＊　＊　＊

太陽は美しく輝き、あるいは太陽が美しく輝くことを願って、ゆっくりと私たちは歩いていった。このように誘うものが何であるか判らないが、これに応える私たち心の中の清らかさを私は信じる。
鳥たちは西方浄土に往生できることを信じながら、太陽の美しく輝くことを願い、そして永劫不変に鳴き続け、草木は季節を超越して同時に囁きあっているが、宿世において仏や菩薩と縁を結んだことのない、つまり無縁のひとはそれら自然の在りようをたとえ区別することが不可能であるにしろ、いま私たちは聴く。私たちの意志の姿勢で、鳥たちや草木の歌い出す限りなく果てしない七十二恒河沙にも匹敵する賛歌を。
あゝわがひと、「私の放浪する半身　愛される人」よ、輝くこの日光の中に忍び込んでいる音も絶えた無明世界を明白に見分けることのできる目の聡明さと知恵など何になろう。比べるものもないほどの静謐な、ひと一人いない山に上って、ひたすら願われた太陽――あの日輪によって殆ど死んでいる湖の全体を宇宙の理法の輝きで遍く照らそうとしているのだから。あゝわがひとよ。

＊　＊　＊

四

「晴れた日に」の初出は『コギト』昭和九年八月号、「わがひとに与ふる哀歌」は同年十一月号である。『コギト』の創刊は昭和七年三月一日、田中克己を介して伊東静雄は昭和八年八月十五号から『コギト』に作品を寄せるようになったが、昭和五十九年九月京都臨川書店復刻版によって『コギト』の全容を見ることができることは既に述べた。吉田等によって言及されているように『コギト』はドイツ文学に積極的にかかわった。昭和七年三月創刊の『コギト』の表紙は、左肩に黒で〝コギト〟、右下に緑字で〝1〟とノンブルされた無地のさっぱりしたものであった。創刊号の編集後記は保田與重郎といわれているが、《「なぜ文学する」、「文学をしだした」、とその生の意識を問はうとする情熱を感じる》とある。服部正己は六号からキルヘルム・ディルタイの「Das Erlebnis und die Dichtung」から「フリードリヒ・ヘル

デルリーン」を訳出している。

表紙デザインは昭和九年七月の二六号から同年十二月まで、ヘルダーリーンの「ヒュペリオン」草稿筆跡等が用いられることになった。昭和十四年九月刊行の松下武雄遺稿集『山上療養館』編集覚え書に保田は『コギト』で《我々はそのころハイデッガーとか、フッサールやシラーなどを云つてゐた》（大岡信「昭和詩史一」『現代詩鑑賞講座第十二巻 明治・大正・昭和詩史』角川書店 一九六九、三〇一頁）書いている。創刊号には服部正己の「ジンメルの言葉」としてゲオルグ・ジンメルの断片（Fragmente und Aufsätze）の翻訳があり、昭和九年十一月三〇号は「独逸浪曼派特輯」で、野田又夫（筆名日高次郎）「島々、ヘルデルリーン考」、中島栄次郎「憂愁について ヘルデルリーン覚書」が掲載されている。大山定一の『魔の山』（トーマス・マン）の訳が連載されるのは二六号から、三三号ではヘルダーリーン「多島海（Der Archipelagus）」にかようような田中克己の「多島海」が発表されている。三九号には松下武雄訳「ヘルデルリーン日記抄（一七八九）」がある。三六、三七、四一号で小高根太郎（筆名三浦常夫）訳「ヘルデルリーンの手紙」、昭和十三年十二月七九号「松下武雄追悼号」では彼の遺詩「メノンの歌」が、昭和十八年一二八、一二九、一三一、一三五号では山田新之輔が「祭りの日、農夫が……（Wie wenn am Feiertage...）」、「ドーナウの源にて（Am Quell der Donau）」、「ゲルマーニヤ（Germanien）」、「多島海」を訳している。

『コギト』昭和九年十一月三〇号「独逸浪曼派特輯」の静雄の詩作品は「わがひとに与ふる哀歌」だが、吉田は《それは単なる偶然だったのか。あるいは、それがその時の静雄のドイツ浪漫派に対する意識的な態度表明だったのか。彼の詩の中で白眉といわれる詩「哀歌」が、ほかならぬ「コギト」第30号に寄せられた理由の論及に、未だ巡り遭っていない》（「コギト」とヘルダーリーン」二三六頁）と述べている。

この論文を吉田は《伊東静雄の詩の成立におよぼしたヘルダーリーン（Friedrich Hölderlin, 1770–1843）の影響は、従来言われてきたほどには決定的ではなかったのではないか》と書き始めているとは前述したが、《詩人の家を訪れた昭和10年の時点において、書架の一段全部を埋めるほど、ドイツ語のヘルダーリーン関係書が手もとにあったとは、ほとんど考え難い。ドイツで刊行されたヘルダーリーンの一次文献・二次文献のいずれもが、当時はまだそれほど多くなかったはずである》（二二九頁）と疑問を発している。ただ昭和七年九月春陽堂から、ドイツ語対訳叢書第一編として出版された吹田順助『ヘルデルリン詩集』を入手している可能性もあると含みを残している。そしてこの論考を次のように締めくくる、《ケストナー、リルケ、ニーチェ、レーナウについてのようには、ヘルダーリーンに関して伊東静雄は何ひとつまとまった意見をのこしていない。ヘルダーリーンに対する彼の関心は、「コギト」同人の熱気につられての、〈お付き合い〉のようなものではなかったか。そのような印象さえ受けるのである》（二三八頁）とする。

大正十一年郁文堂の独和対訳叢書の一冊藤森秀夫訳注『独逸近代名詩選（Perlen der neueren deutschen Lyrik）』には 1. Lebensgenuß. An Neuffer「一、生の楽み」、2. An die Deutschen「二、独逸人に」、3. Rückkehr in die Heimat「三、郷里に帰りて」、4. Hyperions Schicksalslied「四、ヒイペリオンの運命曲」の四篇が取られているという（同二三〇頁）。したがって、静雄が大学生であった大正十五年から昭和四年三月までの時期に、ヘルダーリーンの翻訳はないに等しく、原典にも容易に触れ得なかったのだから、国文学専攻の静雄がヘルダーリーンを愛読していたとは信じ難いとも書いている（「再考伊東静雄とヘルダーリーン」二五五～六頁）。

ドイツ文学と伊東静雄の影響・受容といった論稿では、ヘルダーリーン以外にゲーテ、ウィルヘルム・ミュラー、メーリケ、ゲオルゲ、ホーフマンスタール、ヘッセ、マン、カロッサ、ハイネなどが語られる。わが国の知識人たちを魅了したニーチェ――その生田長江訳の洗礼に静雄も浴した可能性は小さくないだろうと吉田は推察する（「伊東静

雄とドイツ文学」一七頁)。

『呂』昭和七年十一月号「談話のかはりに(一)」のエーリヒ・ケストナー Sachliche Romanze の静雄訳について、吉田は《表題は多少不適切だったとしても、ケストナーの翻訳者として名高い小松太郎や板倉鞆音の訳と比較して、それほど遜色がない》(「再考 伊東静雄とヘルダーリーン」二五六頁)とする。確かに標題は辞書的には、「事実のロマンス」ではなく「即物的物語詩」だろうが、吉田は小松、板倉、静雄訳と比較して、三者の誤訳を指摘したあと、伊東訳が原義に最も近いと断定する。〈Sie saßen allein, und sie sprachen kein Wort/ und konnten es einfach nicht fassen〉の伊東訳《二人だけだつた そして何も話さなかつた/たやすく話はみつからないのであつた》に対して、吉田は《einfach nicht の用法も知らなかったらしい。だが、当時刊行の独和辞典の内容を勘案すれば、伊東の語感はドイツ語に関してもやはり大したもの》(同二五七頁)と好意的である。手もとの相良守峯編『ポケット独和辞典(Kenkyushas Deutsch-Japanisches Taschenwörterbuch)』一九六二年にも einfach nicht は探せないし、例文は das fasse ich nicht が載っているだけである。

リルケであるが、そもそもリルケのわが国への紹介は森鷗外訳『家常茶飯(Das tägliche Leben)』(明治四二年)が初めであり、リルケ熱が高まるのは昭和初期で、昭和二年茅野蕭々訳『リルケ詩抄』第一書房は誤訳が多いにもかかわらず、リルケ普及で大きな役割をはたしたという(吉田「伊東静雄とドイツ文学」十三頁)。

四日谷は『歴史における詩の機能』(前掲)の結語として、《ドイツにおいて、カントが魂の不死、自由、神の存在という人間の究極的関心事を哲学の理論的認識から締め出し、観念論が絶対的主観性に基づいてカテゴリーの演繹に没頭した時期に、「個体は言い表わしがたい」という哲学に対して、まさしくその個体的なものの描出を自らの課題として引き受けたのはポエジーであった》(二二六頁)。従って、《詩作品は、はかなくも弱い人間にとって力となり、つまり将来に向けて行為の方向づけを与え得るのである。ヘルダーリンは、賛歌『回想』の結びの詩行によって、詩人とはまさしくヘーゲルが現代芸術に否認した最高の使命を独自の仕方で引き受けるものであることを謂っている。彼の最後の段階の賛歌と賛歌草案とは、まさしくヘーゲルのかのテーゼの論駁なのである》(二二七~八頁)。

この文章から思い起こされるのは「談話のかはりに(一)」の《ライネル・マリア・リルケに『形象の本(ブウフ・デル・ビルデル)』といふ詩集があり、その絶妙な比喩的精神に僕は帽を脱がされる。常々僕は詩が散文と分派する第一歩はこの比喩的精神であると思つてゐる。(略)はにかみ勝な比喩的精神の表現はその証拠に、独逸では美しいリードになつて育つた。それは又僕などにも魅力ある行き方で、僕の「静かなクセニエ」はそれへの足ならしのつもりである》(『全集』二二二頁)だが、さらに「詩作を覚えた私が 行為よ/どうしてお前に憧れないことがあらう」の一節である。この一節と独逸の美しいリードと『形象の本(ブウフ・デル・ビルデル)』のライネル・マリア・リルケとの相関異同については稿を改めて考察したい。

伊東の蔵書にはゲオルゲ、リルケ、ヘッセ、ノヴァーリス、カロッサ、ホーフマンスタール、ニーチェ、フォンターネ、レーナウ、ゲーテ、ハイネのドイツ語原典があり、片山敏彦訳『リルケ詩集』(新潮社 昭和廿二年五月 六刷、初版は昭和十七年)には、それぞれ詩の読んだ日付と、原典の対応頁と思われる数字がでている。「カザビアンカ」では冒頭節に×が鉛筆で引かれ、自分の訳を試みている(同書五六頁)。また青木敬麿が〝多歌〟の署名で十一月十八日と日付のある手紙には《呂編集会計すべて愈々ぼくがやることにした/方針は Vorwärts! だ。皆が歩いてゐてさへくれたら、ぼくにはうれしい。刺激にも鞭撻にもならぬ「学問」や「趣味」はお断りするつもりだ。できたら全容を見せてくれると、一ばんうれしい。/ゲルは三十銭、頁数いくらでも、月々必ずたのむ。ぼくのしってゐるいろんな人々を、できるだけ広く動員するつもり。一つの方向をとる人々には断念した

のだ。／十一月十八日／多歌／静雄兄／原稿示切／毎月廿五日》のようにドイツ語があらわれている。恐らく戦前の旧制高校生の外国語の力を今の大学生の水準で判断してはいけないのだろう。

主として吉田正勝のいくつかの論稿に依拠しながら、伊東静雄とドイツ文学、特にヘルダーリーン、リルケとの関係を他の研究者をも参照しながらレビューしてみた。しかし筆者自身はヘルダーリーンやリルケの個々の具体的な作品と静雄のそれとの受容・影響関係をいまだしっかりと指摘できないでいる。筆者に残された作業はレクラム版ヘルダーリーン詩集の静雄が印したと思われる複数の原詩、吹田順助『ヘルデルリン詩集』、藤森秀夫訳注『独逸近代名詩選』を分析し、さらに片山敏彦訳『リルケ詩集』に日付されたそれぞれの訳詩と原詩とを比較対照することである。この作業によって伊東静雄のわが国古典、ドイツ文学、故郷諫早への思念が見えてくる。がこの思念の考究は旧制高校生の外国語の力についての論及とともに準備不足のため先送りとしたい。

付録：片山敏彦訳『リルケ詩集』に印された詩をリストする。

七月三十一日　夕暮の鐘が鳴る　ブロンドの幸ひを　静かな家の
八月　一日　中部ボヘミアの風景　落日の最後の挨拶　民謡　冬の朝
三日　夜と成りて　万霊節　菩提樹の初花が
四日　不思議に白い夜な夜な　大きな不思議な花のやうに
それぞれの情感を深めながら　決して光のうすれない星
五日　（日記には〝リルケは夜、『ヘルダーリン頌』を一篇よんだだけ〟）
六日　ときどき母に憧れる　母はいふ　ときどき母は思ふ　たとへば私は　黄いろなる薔薇の花　たとへば私は　夜が薫りに重く
七日　銀に明るい雪の夜（日記には〝夜疲れて、リルケ一篇〟）
九日　愛より „Und wie mag die Liebe“, „Das war der Tag“
十日　„Es ist ein Weltmeer voller Lichte“, „Die Nacht im Silberfunkenklied“, „Schon starb der Tag“
十三日　孔雀の羽　われは好む神龕のマリアを　蟋蟀のやうにすだくものを　カザビアンカ　ボーデン湖
十五日　外の面にて君にし遭はば　わが心悲しみぬ　憧れとは　私は一つの園　日常の中で飢ゑてゐる言葉
十九日　聴き入り驚き観て
二十日　„Die Mädchen sehn“
日付なし　われらの夢は
二十三日　こんな時間に

昭和二十二年九月一日付富士宛《リルケ約六十篇を独逸語でよんだ》（前述）はこのことを言っているのであろう。